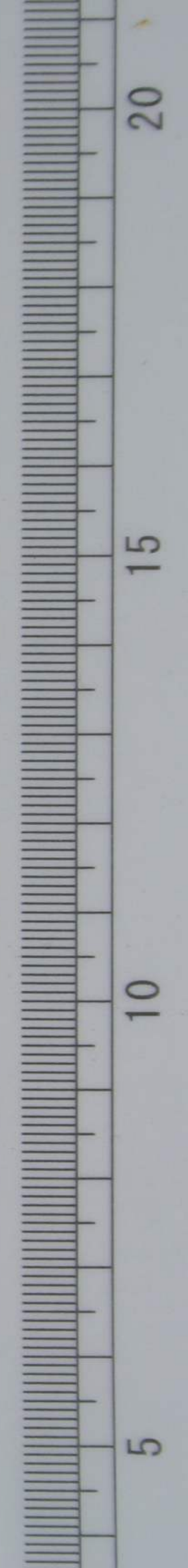


杏竹

内和録之算巻





1
16p. 2. 97.

Tokyo Aug. 2, 1897.
K. Hase.

自序

新躰詩を世に供せんとするは、纂譯者の目的にもあらず、亦た彼の爲し得ざる所なり。彼は彼の知る普通の日本語を以て、彼の常に愛誦する歐米詩人の短吟二三十を世に紹介せんと勉めしのみ。

詩は直譯を許さざるのみならず、亦之を意譯に附するも甚だ難し、故に之を譯するに惟精神譯の一途あるのみ、是れ書中載する所のカーライルの英譯に係るルーテルの賛美歌を見て推了するを得べし。余の

譯の往々原詩の精神だも盡す能はざるは余の深く耻
る所なり、然れども全く譯せざらんに比すれば讀者
に取りて多少の利益なりと信ず。

余の目的は歐米詩人の作を廣く我國讀書社界に推薦
せんとするにあり、故に譯文に附するに原文其儘を
以てし、讀者が其美と優とを作者自身に就て知られ
んが爲の便に供せり。

カーライルの「ダンパーの戦争」はもと散文に成ると雖
も其詩歌的性質は已に長く文學社界に承認せられし

所なり、原文は載せず。

東京青山寓居に於て

明治三十年三月

内村鑑三

目次

一	詩は何なる乎	ラ	マ	イ	テ	イ	ン
一	全	コ	レ	リ	ッ	ヂ	
一	全	ワ	ル	ト、	ホ	イ	ッ
一	詩人の胸中	ロ	バ	イ	ト、	ラ	ブ
一	カンゾーナ	サ	ポ	ナ	ロ	イ	ラ
一	無限大	テ	ニ	ソ	ン		
一	堅き城は我等の神なり	ル	イ	テ	ル		
一	「ロイド、ガリソン」	ロ	イ	エ	ル		
一	短命	ベ	ン、	ジ	ヨ	ン	ソ
一		ン		ソ	ン		

- 一 急がずに休まずに
グーテ
- 一 今日
カーライル
- 一 夕暮
レックェルト
- 一 エンデイミオン
ロングフェロー
- 一 航海中
ウイルコックス夫人
- 一 汝の恐怖を風に任せよ
グヤハート
- 一 吼よ夜の風
キルク、ホワイト
- 一 光り輝く賛美の里
- 一 美はしきソオン
- 一 世々の岩なる神よ
エドワード、ビカステス

- 一 充たされし希望
ホヰツチヤイ
- 一 涙
ブラウニング夫人
- 一 或る詩
無名氏
- 一 更に高き信仰
ツエームス、パツカム
- 一 春の日は琥珀の光を放ち
ブライアント
- 一 志望
マリヤン、エパンス婦
- 一 汝の友
無名氏
- 一 偉大なる人
プロクトル夫人
- 一 我の要むるもの
- 一 ダンバアの戦争
カーライル

一 善き術

無名氏

四

附 録

一、「海」

自作「地人論」に載す

愛 吟

内村 鑑 三 纂 譯

詩は英雄の朝の夢なり

アルフ^ホンソー、ラマーテイン

詩の正當なる反對は散文に非ずして科學なり

コレリッヂ

そは大なる思想が

ア、我が兄弟よ、大なる思想が詩人の天職なり

ワルト、ホイットマン

一

詩人の胸中

ロバート・ラブマン

彼の胸中に囀る鳥あり
寶玉の思想と黄金の語言と
山と牧場と家畜の群とは
皆彼の胸中にあり

喜と悲と闇と明と
日向と日陰と晝と夜と
惡を憎む心と義を愛する念と

不朽ムシロの事業を遂とげんとする
永久不拔の志望と
癒いすへからさる飢渴とは
皆彼の胸中にあり

カンゾーナ(小歌)

サボナローラ

今や賢と良とは翼つばさを收め
無智は戯れ、衆愚は叫ぶ
奢侈は淫歌を唱へて耻ず
哲理は怪訝を説て誇る
詐偽權柄を恣にし
陋猥勝利に榮ふ
我之を見て冀望裏つちに沈む
惟知るメシヤの來て世を治る時は

強壓悉く息んて正義の悦はん事を

六

ア、私の靈よ、汝の未だ覚めざる

紫衣の榮を汝の念頭より絶てよ

綺羅縉紳の交を遠け

權門勢家の寵を避け

阿世の學を斥け

卑見の人を敵とし

汝の心奥に聖想の守衛たれ

ア、私の靈よ、汝天涯に高く翔る時

何者も汝の無垢の翼を穢すべからず

註、伊國愛國者サポナローラ廿歳の時の作なりと傳

ふ、蓋し彼未だフェレラに於ける祖父の家にありし頃、時の貴族并に紳商社會の淫風亂俗を目撃せし時の感を述べし者なるべし、後、彼終に意を決してポログナの寺院に退隱せんとして家を出てんとする前夜、彼の腰笛に合して悲曲を奏し、彼の慈母をして哀悼措く能はざるに至らしめしといへるは或は此小歌を奏せしことなるやも知れず、ア、十四世紀の伊太利、ア、今日の日本。

七

無限大

テニソン

（千八百八十五年十一月刊行「マクミラン」雜誌
の載する處）

一

暗き此世に幾多の庵は、
失せにし人の迹を悲む、
遠き宇宙に幾多の星は
消にし民の墓もて廻轉る、

二

此世の常の歴史なる、
絶ゆる時なき政治論、
億々万の日の面前に、
群り騒ぐ蟻の音、

三

詐偽は此所にも彼所にも、
智者の悲む不信實、
一人の詐偽を掩はんため、
幾千万の詐偽の聲、

四

大經綸や大勳功、

陸海軍の大勝利、

正義の爲に死し人、

名なき戦争に失せし人、

五

生血に養らるゝ無辜の民、

義人を屠る「正義論」、

國の破滅を意はさる、

自由を銜ふ大束縛、

六

榮華の極の宗教家、

疑惑に迷ふ哲學者、

奸智に長くる妖僧は、

幾多の信徒を引き寄する、

七

娛樂の果の廢人、

晝は光に身を縮め、

夜は汚辱の魔に驅られ、

罪の宴遊に意氣昂し、

酒と娼婦に耽ける富

阿諛と賄賂に頼る權

貧より辛き不義の財

骨まで潔き義者の貧

慕ひし人に連れ添ひて

思残れる事はなく

妹脊の契いと深く

愛つる孫子に家榮へ

名利を競ふ國と國

小事に闘く村と村

死をもて守る義士の節

火花の如く消ゆる約

瞬く間の逸樂に

肉と靈とを蕩盡す人

愛に私慾を打消して

十字に身をば釘けし彼

春と夏と秋と冬と、

果つることなき世の輪回、

國の盛衰、沙の變、

合せて何の價ある、

凡ての哲理、詩歌、科學、

人の心の種々の狀、

卑しき物も高き物も、

穢き物も清き物も、

渾か墓に終るとならは、

人の世に在る何故乎、

無限に吸はれ死に吞まれ、

意味なき過去と消ん爲に乎、

軒に呻吟る蚊の群乎、

箱巢に怒る密蜂乎、

ア、言を休めよ、我は彼を愛せり、

死者は死なすして生けり、

註、末節并に第十一節に於て「彼」と言て「人」或は「者」と言はざるは勿論詩人の崇拜物を指して言へばなり、是れ彼が In Memoriam に於て「強き神の子、不朽の愛」と謳ひしナザレの人を言ひしなり。

堅き城は我等の神なり

ルイテル

堅き城は我等の神なり、
彼は據るへき築堡なり、
我等に臨みし凡ての悪より、
彼は美事に我等を救はん、
夫の古よりの悪しき者は、
今は猛威を悉くして立てり、
政權を以て装ひ、
邪曲の計を施らす、

世に彼に當る者なし。

十八

註、「夫の古よりの悪しき者」Der alte böse Feind「悪魔なり、政權に頼り、邪計を施らし、志士を強壓す、古今東西變ることなし。」

若し我等の力に頼らは

我等は直に失はれむ、

然れど一人の聖き者の

我等の爲に戦ふあり、

彼何人と尋ぬる乎、

イエスキリスト其人なり、

サバオスの神に在して、

彼の他に神あるなし、

彼我等と共に戦ふ。

註、「サバオスの神」(Der Herre Zebaoth)「萬軍の主」の意、

キリスト崇拜、「新神學者」の嘲弄物、貧叟博士の哲學

的(?)、戯談の好題目、然れどマルチン、ルイテルの宗

教。

十九

たどへ悪魔は世界に充ちて、

我等を呑まんと企つるも、

我等は少しも心に留めじ、

彼は我等に勝つ能はず、

此地に權を握る者は、

如何に苛立騒くとも、

我等に害を加ふるを得じ、

彼の運命は已に定まれり、

一言以て彼を殺すべし、

註、

「此地に權を握る者」Der Fürste dieser Welt 魔王な

り、改革者の一言に急所を刺されて憤恚するの族。

神の勅命は已に降れり、

是を毀つの權威あるなし、

彼は我等の味方なり、

力と靈とを我等に給ふ、

我等の生命を奪ふも可し、

我等の名譽を毀つも可し、

財も妻も子も與へん、

然れど彼等は何も得じ、

神の聖國は竟に仆れず、

註、「彼等(Sie haben's kein Gewinn) 魔族を云ふ、義人を殺して勝てりと信する類。

ロイド、ガリソン

陰き部屋に友なく名なく、
活字を拾ふ貧しき青年、
場所暗くして裝飾なし、
然れど自由は此所に醸せり。

賛助の來る目的なく、
雙手に世界の任を負ふ、
彼は植字の術を知れり、

勇氣と印刷機械とあり。

彼の如きは燃る髓

統系造る中の眞

週圍の冷躰彼に化し

燃る焰の熱に湧く

ア、眞理よ、ア、自由よ、
汝は昔も今も尙ほ

馬槽の牀にはごくまる、
(路可傳二章七節)

夜の關の木碎く手は

賤の伏屋に人と成る。

溪河を源近く過ぎる時

其行末を推量り難し

貢を數多の小川に受けて

潮の如くに海に臨む。

ア、小なる端緒よ、
至誠に據り、

不撓に築きて汝は大にして強し、

* * * * *

汝は不義に勝ち樂土を拓き、
王冠を得て之を戴て耻す。

註、ウイリヤム、ロイド、ガリソン、は黒奴廢止運動卒先
者の一人なり、千八百二十六年、即ち彼の二十二歳
の頃より頻りに時の政權金權に逆らひ、獨力を以て
痛く黒奴使役制度を攻撃せり、彼の發行にかゝりし、
「リベレーター」(放免)なる雜誌は南方諸州の忌み嫌ふ處
となり、シヨルシヤ洲の如きは五千弗の賞を懸けて
法律上此雜誌の禁壓を企つるに至れり、然れども勇

敢獨歩のガリソンなにか臆すべき、彼は發行を續け
て益々廣く之を散布し、終に千八百六十年の國民的
大運動を見るに至れり、雜誌を發行するならば如此
き企計と精神とを以てすべし、貴顯の補助金を頼み、
俗論の贊助を待つの雜誌記者は大に此米人に學ぶ處
ありて可なり。

短命

ペン、シヨンソソ

木の嵩を増すが如く
 伸びて必ず好き人ならず、
 櫃は三百年を経て
 枯れて仆れて丸太たるのみ、
 其日限りの百合の花は
 五月の園にはるか麗はし、
 たとへ其夜仆ふれて死ぬも、
 光輝の草と花とにてありき、

美は精細の器に現はれ、
 生は短期の命を全し。

註、楠正行の生涯、木村重成の生涯、詩人キルク、ホ
 ワイトの生涯、美術家ラフィエルの生涯、是皆短く
 して美なる生涯なりき、齡耳順に垂とし、位人臣を
 極め、尙も美勳偉功の人世に供するなく、錦繡に纏
 はれなから終に丸太となりて朽果つ、悲しむべく憫
 れむべき生涯ならずや。

急がずに、休まずに

三十

ゲーテ

急がずに、休まずに、

是ぞ汝の胸飾

心の底の奥に留め、

浪風荒く吹き捲くも、

花咲く小徑たどるにも、

世を去るまでの旗章。

急がずに、心して、

心の駒の手綱取れ、

静に思ひ、能く計り、

決めて全力もて進め、

急がずに、歳を経て、

思慮なき行爲に悔みすな。

休まずに、よく勵め、

過ぎ行く年の足早し、

何にか朽ざる善き仕事、

浮世の旅の紀念物、

三十一

遺^{のこ}して我の身は果つも、
世々に長^{なが}生^ひふその榮譽。

急がずに、休まずに、

静に天の命を待て、

義務は汝の指南軍、

何はともあれ正を踐^ふめ、

急がずに、休まずに、

闘^{たう}終^{かい}へて後の晁^{かん}。

徳川家康

惰^おらす行かば千里の外も見ん、

牛の歩^{あひ}のよし遅くとも

今日

トマス、カール

三十四

茲に白日又來りけり

浪費せさらん事を勉めよ

此日永遠より來り

夜と共に永遠に去る。

人未だ曾て此日を見ず、

逝て再び之を見る者なし、

茲に白天又來りけり、

浪費せさらん事を勉めよ。

佐久間象山

日晷一移千載無再來之今、

形神既離萬古無再生之我、

學藝事業豈可悠々。

三十五

夕暮

フリドリッヒ、レツケルト

天の雲に浸ひたされて

地は静せい穩えんに歸きせり、

晚いり鐘かねの音ねに伴ともはれて

自然は眠ねに就つけり。

エ ン デ イ ミ オ ン

ロ ン グ フ ェ ロ ー

登のぼる月つきに星ほしかくれ

金こがねの如ごときそのひかり

彼所あちこち此所こちこちに影かげ撒まきて

青あおき野原のほらの上のうへに輝かがる

斯しくも静しづけき宵よの間に

小森こもりの陰かげに獨ひと寝ねて

夢ゆめにも遇あはぬ婀娜あな神かみの

接吻すくに觸れしエンディミオン

ダイヤナの接吻すくは人の愛

求めぬ時の贈物おくりもの

言はず語らず、知らぬ間に

深き情なさけの一凝視ひとみづめ

ア、憂うれひに沈むものよ

ア、患難わざみと恐怖おそれの下もとに

疲れし頭かぶを低たるものよ

汝も愛せらるゝなり

如何いかに運命拙つたなきも

如何いかに此世は淋さびしきも

知らぬ情なさけの友ありて

此身の憂うれひに應こたふらん

註、希臘神話に曰ふ、牧者エンディミオン、主神ジュ

ピターに乞ふに紅顔を保ちながら終生を睡眠の中に
過すまさん事を以てす、ジュピター之を容し、彼をして

ラトモス山頂に登り、獨り眠に就かしむ、女神デイ
ヤナ之を見て夜々降り來て彼を接吻す、デイヤナは
月神なり。

四十

嗚呼此淋しき世の中、此無情なる社界、今や清士友
を得るに難し、然れども世は未だ全く魔族のものに
非ず、同情者は存するなり、慰めよ。

航海中

エラ、ウィルコックス夫人

風は何れの方より吹くも
かく吹かましと待つ人あれば
東よりするも西よりするも
吹く其風を善と定めん
波路を行くは我のみならず
海原遠く漕ぎ出る
津々浦々の百千舟
我に追風吹く時は

四十一

逆波高く捲り来て
 磯根に觸るゝ舟もあらん
 然らば我舟行らんとて
 我に方向好き風を祈らじ
 行るも行らぬもいと高き
 神の指圖に任しつゝ
 浪立つ時も風ぐ時も
 何かなる風の吹く時も
 心安くぞ我が舟の
 梶をば彼の手に委ね

危き波路過き越して
 我か行く先に着くぞ嬉しき

さらは何かなる風吹くも
 かく吹かましと待つ人あれば
 東よりするも西よりするも
 吹く其風を善と定めん

註、曰く保守風、曰く歐化風、保守風吹きしが故に
 和學者は財産を作り、神主は顯位に登れり、よし之

が爲めに洋學者は饑餓に泣き、基督信徒は迫害せられしも、幾多の守舊家は幸運を賀し佳節を祝したり、皇天素是れ同仁、豈是に厚くして彼に薄きの理あらんや、吹けよ保守風、帆を擧げよ、神主と和學者、攝理が汝が許す間は汝が榮ふべきの時なり。

汝の恐怖を風に任かせよ

ゲヤハート

汝の恐怖を風に任かせよ

望んで狼狽よためくなかれ

神は汝の悲鳴を聞けり

神は汝の頭を擡もたげん

暗き雨夜の波路の中に

神は汝の道を開かん

彼の時を俟てよ然らば

夜は喜樂の晝ひると終らん

四十六

彼の支配は宇宙に亘り

万物皆彼に従ふ

彼れ爲して惠めぐみならざるはなし

彼れ導きて光ならざるはなし

汝は未だ彼を解せず

然れど天と地とは告く

神は天上に主權を握り

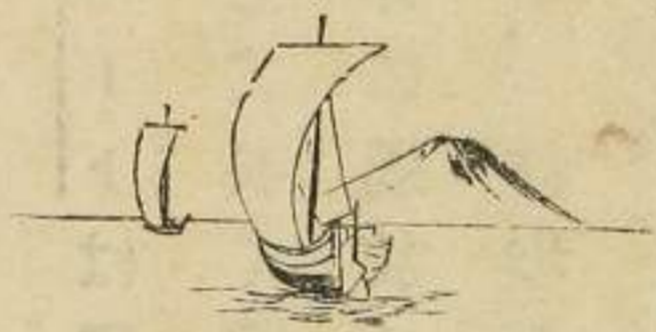
能く万物を治め給ふと

註、バウル、ゲヤハートは獨逸國伯林朝廷に事へ、

其宮中の説教師として長く職を奉ぜし人なり、然るに終に讒に遇ひ都外に逐放せらるゝに至れり、彼れ冤を訴ふるに所なく、亦歩を向くるの目的地なし、一夜僻陬の旅館に宿し、夫人の愁歎其極に達す、ゲヤハート彼女を慰むるに術なく、此詩を作て彼女に示す、而して慰諭の言未だ終らざるに二人の紳士の刺を通して彼を見んと欲する者あるに會す、出て彼等に接すればサクソニア國の撰侯より特に彼を迎へ

四十七

ん爲めに送りし使者なりき、曰ふ侯彼の不遇を聞て
迎へてサクソニー朝廷の説教師となさんとすと、彼
れ直に走て夫人に告げ、眞神の教導の驚くべきを示
す。



吼よ夜の風

ヘンリー、キルク、ホワイト

吼^{ほえ}よ夜の風、汝の力を合^{あは}せよ

神の大命なしに

汝は山の松の樹に

雀のねぐらを亂す能はず

余は未だ多く此青年詩人（彼は二十一歳を一期とし
て逝けり）の作を讀まず、然れど簡短なる彼の傳記
と此一小篇とは彼をして余の永久の友人たらしめた

り、是れ馬太傳第十章二十九節に於ける

二羽の雀は一錢にて售に非すや然るに爾等の父の許なくば其一羽も地に隕ること有じ

との基督の言を歌ひし者なり、彼れホワイト少時より懷疑の風に襲はれ、信仰上彼の立脚の地を失はんとせし時此述懐あり大に安寧を得たりと云ふ、哲理的に神を疑ひつゝ心靈的に彼に頼るの状を綴りしものとしては余は他に未だ此の如きを識らず。

光り輝く賛美の里

つみかさなれる雲間を過て

キリスト信徒の心の空に

彼方の光は潮の如く

よろこばしくも心を充たす

光り輝く賛美の里に

夥多群らかる清き友の

絶えず奏る響の音は

はや我等の耳に觸れぬ

川の彼方の岸邊に立て
我等は遇ふてまた離れじ
四時變らぬすしき夏の
光り輝く賛美の里に

旅路の終くるまでの
なほ暫時の疲れ足
夕影暗くなるまでの
なほ暫時の憂き仕事
暮るれば床に息ひねて

眠れば夜は直き明けて
光り輝く賛美の里に
我等は起てまた眠らじ
川の彼方の岸邊に立て
我等は遇ふてまた離れじ
四時變らぬすしき夏の
光り輝く賛美の里に

註、キリスト信徒の未來觀念並に之に伴ふ復活の信
仰に就ては智者と才子と『新神學者』と青年批評家とを

以て満ち充ちたる日本今日の讀者の深く余輩を憐み
笑ふ處なるべし、余輩の迷や深し、ア、余輩の迷を
憐れめ。



美はしきジオン

天上の美はしきジオン

我の愛する美はしき城

真珠の如き美はしき門

神の在す美はしき宮

クラニオンに失せし者が (路可傳三十三章三十三)

我が爲に其門を開かん

ジオンよ、美はしきジオンよ

神の城なる美はしきジオンよ

光り輝く美はしき天國
 白きを纏ふ美はしき天使
 絶間なき美はしき歌
 響き渡る美はしき琴
 我も賛美の群にまじり
 そこに救主の聖名をたもへん
 シオンよ、美はしきシオンよ
 神の城なる美はしきシオンよ

王キリストの美はしき帝座
 天使の歌ふ美はしき歌
 漂流止んで美はしき休
 平和の充る美はしき家
 我か眼はそこにイエスを見ん
 我は救主の家に急がん
 シオンよ、美はしきシオンよ
 神の城なる美はしきシオンよ

世々の岩なる神よ (詩篇九十編に依る)

エドワード、エイチ、ビカステス

世々の岩なる神よ

爾はとこしなへに

我の安き隠家なりき

天地の始より

今も尙ほ同し

世は終るとも

變らざる君よ

我の命は小山の面に

映りて消ゆる影の如し

或は牧場の朝の露に

咲きて直く散る花の如し

寢る間の夢 旅人の

一夜語りの話種

うつろひ易き花衣の

失せて迹なき榮なり

寢ることなき我神

虧ることなき光

我歲月の盡る前に

我の命數を悟らしめよ

爾の矜恤を垂れ

爾の慈愛を降し

爾の常に恵み給ひにし

此心をして淋しからざらしめよ

充たされし希望

學校歸りのふたりの女子

たがひの目的問ひ合せしに、

彼女は云へり、妾は女王となりて治めん、

是女は云へり、妾は廣く世界を見んと。

年経て後に復た會ひし時、

たかひの位置を問ひ合せしに、

彼女は云へり、妾は實に女王となれり、

貧しき人の妻にはあれど、
樂しき家族は妾の民なり、
實なる夫は妾の王なり、
愛の勤は妾の律なり、
そなたは如何に成行きにしや。

是女は云へり、廣き世界は昔も今も
未だ見ぬ國となりてのこりぬ、
愛と義務との境を越えて、
妾の足は出しことなし。

廣き世界のその音信に
妾は耳を傾けもせず、
妾の母の病の寢間は
妾の世界にあるそかし。

兩人互に手を取り合せ、
喜び涙にむせびて泣けり、
神は幼時の願を聞けり
我等の望は充たされたりと。

涙なみだ

アラウニング夫人

神に謝せよ、神を祝せよ、

汝泣くより以上の苦痛を感せざる者よ、

泣くは善し、是れ輕き苦痛なり、

アダム樂園を逐はれし以來

是より輕き苦痛あるなし。

涙？ 涙何物ぞ？

母の守歌聞きながら嬰兒は籃の中に泣く、

祝儀の鐘の響く時涙に咽ぶ花嫁子、

天の美想の降る時詩人の頬に垂る粟、

神に謝せよ、汝たゞ泣く者よ、

若し涙に暗みて汝の墓を覓めつゝ、

荒野に獨り遑ふ時

天上を仰き見よ、湛へる涙は河となりて、

擡げし汝の面を下り、

天に輝く日と星とは、

清き汝の眼に映らん、

『或る詩』

無名氏

六十六

我のこの世につかはされしは、
わが意を世に張る爲めならで、
神の恵をうけんため、
そのみむねをばとげん爲めなり、

なみだの谷や笑の園、
かなしみは來んよろこびと、
よろこび受けんふたつとも、

神のみこゝろならばこそ、

勇者のたけき力をも、
教師のもゆる雄辯も、
われ望まぬにあらねども、
みむねのまゝにあるにはしかじ。

弱き此身はいかにして、
そのつとめをばはつべきや、
われは知らねど神はしる、

六十七

神に頼る身は無益ならぬを。

六十八

小なるつとめ小ならず、
世を蓋ふとても大ならず、
小はわが意をなすにあり、
大はみむぬによるにあり。

わが手を取れよわが神よ、
我行くみちを導けよ、
われの目的は御意をば、

爲すか忍ぶにあるなれば。

附言、此詩 A Poem (或る詩)と題して米國の一小宗
教雜誌に載りしものなり、蓋し作者は身軀虚弱を歎
するの際、天上よりの慰藉に與かり、其時の感を綴り
しものなるが如し、余は少時より是を愛誦し、軀軀
の苦痛を慰めし事屢々ありき、譯して拙著「基督信
徒のなぐさめ」に載せたり。

六十九

更に高き信仰

シエームス、バツカム

嗚呼神よ、悲惨の道は

余か爾に到るの經路なりき

而して今も尙ほ暗黒の裏に在て

余は目を閉て惟爾に従ふ

幽陰日光單に爾の聖旨に任す

悲喜哀樂唯爾の命に従はん

爾の大圖に則りて

余の生涯は聖ならざるを得ず



春の日は琥珀の光を放ち

ブライアント

春の日は琥珀こほろの光を放ち

若芽わかめ發よく木きと眞草まぐさを輝てるす

春にも優まよる笑えみを以て

萌もゆる青葉あをばを迎むかへし者は

今は彼女の墓ひかにあり

彼女の墓そこの底そこにあり

嬋妍あてなる白あき花はなは

森この小徑みちに添そふて咲さく

花はなにも優まよる手てを以て

そを摘つみ取りし手弱たよめ女めは

今は彼女の墓ひかにあり

彼女の墓そこの底そこにあり

茂しげれる森もりに朝あ早く

小鳥こどり群むらり謠うたふ時

鳥とりにも優まよる聲こゑを以て

我われにその音ねを傳つたへ來きし

彼女は今は墓にあり
彼女の墓の底にあり

はやき頃のその音に

我が眼に浮ぶ血の涙

張り裂くばかり我が胸に

花咲く毎に思出る

彼女は今は墓にあり

彼女の墓の底にあり

志望

マリヤン、エバンス婦「ジョーシ、エリオット」

我も夫の純潔の域に達し

憂に沈む者の力の盃となり

熱き情を傳へ、清き愛を授け

悪意を交へざる微笑を咲かせ

至る所に温良の香を放ち

放て益々心に芳からんことを

斯くて世に喜の音を奏する

天上の樂に我も和せん事を

汝の友

七十六

「インヂヤナポリス、シヤアーナル」の載する處

汝の友は覓めずして汝に來るべし、

世に彼の愛を購ふの價あるなし、

汝は一見して彼の汝の友たるを識るを得べし、

汝は直に心を開放して彼と共に語るを得べし、

健氣に彼を迎へよ、善く彼を愛せよ、

篤く彼を信ぜよ、永久に彼に任せよ、

眞正の友は只一回汝の生路に來る。

偉大なる人

アデレイド、プロクトル夫人

愛の爲に至誠の心を以て

惜ます與ふる人は大なり

然れど愛の爲に、臆せず物を受くる人は

更に大なる人と稱へん

我は自由に大過を赦す

氣高き人の前に平伏す

然れど赦されて、能く其責に堪ふる人は

七十七

更に氣高き人と稱へん

七十八

註

天の與ふるを取らざる者は却て其咎とがを受く。



我の要むるもの

圓滿無謬の哲理に非す

森嚴偉大の教義に非す

山なすばかりの富に非す

誘よほふ笑わらの力に非す

亦銳利の筆に非す

人ひとなり

七十九

ダンバーの戦争

カーライル著「コロムウエル傳」に依る

一千六百五十年蘇格蘭人盟を破り、暗主チャレス二世を立て、王をなし、英人の自由を奪ひ、再び昔時の強壓を回復せんと計る、コロムウエル直に英軍に將さして蘇地に入り、轉戦の後竟に慰癒をダンバーの地に求めざるを得ざるに至れり、地は英蘇兩國の境を距る遠からず、セルマン海に突出する小半島なり、ブロックバルンは其南境を限る溪流なり。

頃は九月十二日

實の秋はまだ早く

降りしく雨に道濡れて

行きかふ雲に月隠る

我等は一万一千人

敵地に深く攻め入りて

飢と病に惱まされ

ダンバー指して引退く

向はいづこアベの崎

白耳曼海やレイス灣

白波被るベッス岩

入江に潜むベルハーベン

八十二

三方海に圍まれて
餘るは西の山つゞき

プロクバルンの底深く
南に通ふ途を絶つ

敵は二万と七千餘
蘇格蘭の華を盡し
レスレー將軍率き具して

ダウンの岡に陣を布く

『今は遁さぬコロムウエル
袋の中に獲し鼠
英吉利勢の運の果
自由民権こゝに殲さん』

海は洪波を揚げて思兢々
風は悲鳴を奏して望茫々
仰て天に訴へて月應へず

八十三

伏て地に哭して岩に感なし

知る大能の風に乗て走るを

信ず神明の山に據て守るを

彼一たび命して浪に聲なし

彼三たび令して萬軍潰ふ

懼るゝな我が兵おそ

信せよ神の救すくひを

祈て怠るな

火薬を沾しめらすな

十二日の暮くれつ方、遙に敵軍を見渡せばダウンの岡
を下り來て、ブロツクバルンの右岸に陣を張る、
之を見しコロムウエル

「如何にラムバート、彼の山より降り來りしは我
を撃んが爲なり、彼の陣地は狭くして大軍を操
縦するに便ならず、我より迎へて彼を撃つに若
かず、敵の中堅はかしこにあり、我の全力を注
集して是を碎けば他は撃すして潰ゆべし、汝如

何に意ふや。」

小將ラムベルト

「余は閣下に同事を語らんと意へり。」

コロムウエル

「モンクは如何に思ふや。」

大佐モンク

「閣下の言の如し。」

コロムウエル

「然らば進撃は明朝拂曉と定めん。」

收獲月の影暗く

嘯く秋の風寒し

明日は命の終かも

耻と榮の岐路

祈れや祈れ我が友よ

今宵限りの世の職務

明日は自由の血に染みて

天國に神の榮讃へん

「ア、神よ、此身を再び爾に捧ぐ、爾の聖旨を成
させ給へ、此國民を救ひ給へ、爾の僕を殺して
爾の聖名を尊崇させ給へ、アーメン」

夜は白らみ始めぬ、戦闘の時は到りぬ、ホッソドン
先づ進むべし、痛く敵の右翼を衝け、
ラムベルトは未だ來らざる乎、彼の來る何ぞ遅き、
敵の喇叭は鳴れり、ア、ラムベルト

ランベルトはここにあり、喜し、進軍を
吹け、
「萬軍の神」「萬軍の神」……進め、

私の勇者よ、懸れ、主の名に依て、

敵の騎兵は迫りぬ
鎗を閃かして

私の騎兵は迎へぬ

川の真中に於て

我隊少しく退きぬ

然れど神は力を賜ひぬ

我等は取て返しぬ

敵を捲り上げぬ

モンクの歩兵は續きぬ

敵の陣は亂れぬ

我等は民の仇を剪りぬ

自由の敵を殲しぬ

ゼルマン海にさし昇る

朝日に山の霧霽れて

神の聖前に我か敵は

木の葉の如くに吹き散らさる

ダウンの岡に秋清く

敵の戸に艸赤く

山と海とに響かせて、

神に讚美の聲揚る

(詩篇第百十七編、Bangor の譜に合して)

諸の國よ

汝等エホバを讚めまつれ

諸の民よ

汝等エホバを稱へまつれ

そは我等に賜ふ

その憐憫はおほいなり

エホバを讃めまつれ
その眞實は絶るこゝなし

斬殺三千、擒獲一萬人、我失不充二十、空前絶後
之大勝利。

影を追て實を求めざる者は此の如し、
權に阿りて民を輕する者も亦此の如し、
神は衆生を愛し無辜を顧み、
ダンバーに孤軍を拯ふて萬國の民に示しぬ。

神よ爾の敵は皆是の如く亡ひよかし、
亦神を愛する者は日の眞盛まっさかに昇るが如くなれよか
し。
(士師記第五章三十一節)

善き術よきすべ

九十四

よむ人志らす

此世は實に憂き世なり

人の好意に合ふ難し

巧たくみに鼓弓こきう弾く人は

笛吹く人の邪魔をなす

我の度々思ふには

如何に此世は喜きぞかし

若しも我知る人毎に

我の心を受くるならば

然れど此事叶はねば

世を経る我の善き術は

人の言ふ事氣に留めで

義務のまゝをなすにあり

九十五

附 録

海

『地人論』に載する所

海よ、海よ、我を寛くせよ、

俗界の權者我を擒にし、

その古俗と舊習とは我を檻し、

我をして我が羽翼を伸し得ざらしむ。

我は海鷗の自由を慕ふなり、

我は鷗かいぶらの飛力を羨むなり、

無窮の靈を有する我は、

此壓迫狹隘に堪ゆる能はざるなり。

海よ、海よ、我を清くせよ、

腐敗は平原都城を襲へり、

山間の仙境亦陋習に化せり、

浩然の氣我今之を全土に求むる能はず。

洋面到る處酸氣多し、

海上波靜かなる時風に香味あり、

清淨を愛する我の靈は、

此穢此汚に堪ゆる能はざるなり。

海よ、海よ、我を強くせよ、
配慮は我の英氣を挫けり、
辛勞は我の思惟を壓せり、
我精我筋將に縮滅せんと欲す。
濤上風に逆ふ時我に膽力生る、
船頭梶を御する時我に恐怖なし、
活動を要する我の生は
此軟此弱に堪ゆる能はざるなり。

愛

吟終

(26)

GREAT.

I hold him great who, for love's sake,
Can give with generous, earnest will;
Yet he who takes for love's sweet sake
I think I hold more generous still.
I bow before the noble mind
That freely some great wrong forgives;
Yet nobler is the one forgiven
Who bears that burden well and lives.

Adelaide A. Proctor.

WANTED.

Not systems fit and wise,
Not faiths with rigid eyes,
Not wealth in mountains piled,
Not power with gracious smile,
Not e'en the potent pen.

Wanted, *men!*

(27)

THE BEST WAY.

This world is a difficult world, indeed,
And the people are hard to suit,
And the man who plays on the violin
Is a bore to the man with a flute.

And I myself have often thought
How very much better 't would be,
If every one of the folks that I know
Would only agree with me.

But since they will not, then the very best way
To make this world look bright
Is never to mind what people say,
But do what you think is right.



"THE MAY SUN SHEDS AN AMBER LIGHT."

The May sun sheds an amber light
On new-leaved woods and lawns between;
But she who, with a smile more bright,
Welcomed and watched the springing green,
Is in her grave,
Low in her grave.

The fair white blossoms of the wood
In groups beside the pathway stand;
But one, the gentle and the good,
Who cropped them with a fairer hand,
Is in her grave,
Low in her grave.

Upon the woodland's morning airs
The small birds' mingled notes are flung;
But she, whose voice, more sweet than theirs
Once bade me listen while they sung,
Is in her grave,
Low in her grave.

That music of the early year
Brings tears of anguish to my eyes;
My heart aches when the flowers appear;
For then I think of her who lies
Within her grave,
Low in her grave.

William Cullen Bryant.

A WISH.

May I reach
That purest heaven,—be to other souls
The cup of strength in some great agony,
Enkindle generous ardor, feed pure love,
Beget the smiles that have no cruelty,
Be the sweet presence of a good diffused,
And in diffusion ever more intense!
So shall I join the choir invisible
Whose music is the gladness of the world.

"George Elliot."

THY FRIEND.

From *Indianapolis Journal*.

Thy friend will come to thee unsought;
With nothing can his love be bought;
His soul thine own will know at sight;
With him thy heart can speak out right.
Greet him nobly; love him well;
Show him where your best thoughts dwell;
Trust him greatly and for aye:
A true friend comes but once your way.

(22)

A POEM.

I am not sent a pilgrim here,
My heart with earth to fill ;
But I am here God's grace to learn,
And serve God's sovereign will.

He leads me on through smiles and tears,
Grief follows gladness still ;
But let me welcome both alike
Since both work out His will.

The strong man's strength to toil for Christ,
The fervent preacher's skill
I sometimes will,—but better far
To be just what God will.

I know not how this languid life
May life's vast ends fulfill ;
He knows,—and that life is not lost
That answers best His will.

No service in itself is small,
None great, though earth it fill ;
But that is small that seeks its own,
And great that seeks God's will.

Then hold my hand, most gracious Lord,
Guide all my goings still :
And let this be my life's one aim,
To do or bear thy will.

Anonymous.

(23)

THE HIGHER FAITH.

O God! the path of grief has been
My way of guidance unto Thee ;
And still, through clouds that shut me in,
I follow though I cannot see.

Or tears or sunshine, as Thou wilt,
Or joy or pain, or ease or strife,
So be it; to Thy purpose built,
Diviner uses mold my life.

James Buckham.

GRANTED WISHES.

Two little girls loose from school
 Queried what each would be,
 One said: "I'd be a queen and rule;"
 And one, "The world I'd see."
 The years went on. Again they met
 And queried what had been;
 "A poor man's wife am I, and yet,"
 Said one, "I am a queen."
 My realm a happy household is,
 My king a husband true;
 I rule by loving services;
 How has it been with you?"
 She answered: "Still the great world lies
 Beyond me as it laid;
 O'er love's and duty's boundaries
 My feet have never strayed.
 "Faint murmurs of the wide world come
 Unheeded to my ear;
 My widowed mother's sick bedroom
 Sufficeth for my sphere."
 They clasped each other's hands; with tears
 Of solemn joy they cried;
 God gave the wish of our young years,
 And we are satisfied."

John G. Whittier.

TEARS.

Thank God, bless God, all ye who suffer not
 More grief than ye can weep for. That is well—
 That is light grieving! lighter, none befell,
 Since Adam forfeited the primal lot.
 Tears! what are tears? The babe weeps in its cot,
 The mother singing; at her marriage bell
 The bride weeps; and before the oracle
 Of high-famed hills, the poet has forgot
 Such moisture on his cheeks. Thank God for grace
 Ye who weep only! If, as some have done,
 Ye grope tear-blinded in a desert place,
 And touch but tombs,—look up! Those tears will run
 Soon in long rivers down the lifted face,
 And leave the vision clear for stars and sun.

Mrs. Browning

BEAUTIFUL ZION.

Beautiful Zion, built above,
Beautiful city that I love;
Beautiful gates of pearly white,
Beautiful temple,—God its light;
He who was slain on Calvary
Opens those pearly gates to me.
 Zion, Zion, lovely Zion,
 Beautiful Zion, city of our God.

Beautiful heaven, where all is light;
Beautiful angels, clothed in white;
Beautiful strains that never tire;
Beautiful harps through all the choir,—
There shall I join the chorus sweet,
Worshipping at the Saviour's feet.
 Zion, Zion, lovely Zion,
 Beautiful Zion, city of our God.

Beautiful throne, for Christ our King,
Beautiful songs the angels sing;
Beautiful rest,—all wanderings cease;
Beautiful home of perfect peace,—
There shall my eyes the Saviour see;
Haste to his heavenly home with me.
 Zion, Zion, lovely Zion,
 Beautiful Zion, city of our God.

O GOD, THE ROCK OF AGES.

O God, the Rock of Ages,
 Who evermore hast been,
What time the tempest rages,
 Our dwelling-place serene:
Before Thy first creations,
 O Lord, the same as now,
To endless generations,
 The Everlasting Thou!
Our years are like the shadows
 On sunny hills that lie,
Or grasses in the meadows
 That blossom but to die:
A sleep, a dream, a story
 By strangers quickly told,
An unremaining glory
 Of things that soon are old.
O Thou who canst not slumber,
 Whose light grows never pale,
Teach us aright to number
 Our years before they fail!
On us Thy mercy lighten,
 On us Thy goodness rest,
And let Thy spirit brighten
 The hearts Thyself hast blessed!

Rev. Edward H. Bickersteth.

GIVE TO THE WINDS THY FEARS.

Give to the winds thy fears;
Hope and be undismayed;
God hears thy sighs and counts thy tears;
God shall lift up thy head.

Through waves, through clouds and storms,
He gently clears thy way;
Wait thou His time; so shall the night
Soon end in joyous day.

He everywhere hath rule,
And all things serve His might.
His every act pure blessing is,
His path unsullied light.

Thou comprehend'st Him not;
Yet earth and heaven tell,
God sits as sovereign on the throne;
He ruleth all things well.

Paul Gerhardt.

Howl, winds of night! your force combine.
Without His high behest,
Ye shall not, in the mountain-pine,
Disturb the sparrow's nest.

Henry Kirk White.

THE BRIGHT FOREVER.

Breaking through the clouds that gather
O'er the Christian's natal skies,
Distant beams, like floods of glory,
Fill the soul with glad surprise;
And we almost hear the echo
Of the pure and holy throng,
In the bright, the bright forever,
In the summer-land of song.

On the banks beyond the river
We shall meet, no more to sever;
In the bright, the bright for ever,
In the summer-land of song.

Yet a little while we linger
Ere we reach our journey's end;
Yet a little while to labor
Ere the ev'ning shades descend;
Then we'll lay us down to slumber,
But the night will soon be o'er;
In the bright, the bright forever,
We shall wake, to sleep no more.
On the banks beyond the river
We shall meet, no more to sever;
In the bright, the bright for ever,
In the summer-land of song.

ENDYMION.

The rising moon has hid the stars;
Her level rays, like golden bars,
Lie on the landscape green,
With shadows brown between.

On such a tranquil night as this
She woke Endymion with a kiss,
When, sleeping in the grove,
He dreamed not of her love.

Like Dian's kiss, unasked, unsought,
Love gives itself, but is not bought;
Nor voice, nor sound betrays
Its deep, impassioned gaze.

* * * * *

O weary hearts! O slumbering eyes!
O drooping souls, whose destinies
Are fraught with fear and pain,
Ye shall be loved again!

No one is so accursed by fate,
No one so utterly desolate,
But some heart, though unknown,
Responds unto his own.

Henry Wadsworth Longfellow.

EN VOYAGE.

Whichever way the wind doth blow
Some heart is glad to have it so,
Then blow it east or blow it west,
The wind that blows, that wind is best.

My little craft sails not alone;
A thousand fleets from every zone
Are out upon a thousand seas;
And what for me were favoring breeze
Might dash another, with the shock
Of doom, upon some hidden rock.
And so I do not dare to pray
For winds to waft me on my way,
But leave it to a higher will
To stay or speed me, trusting still
That all is well, and sure that He
Who launched my bark will sail with me
Through storm and calm, and will not fail
Whatever breezes may prevail,
To land me—every peril past—
Within his sheltering haven at last.

Then whatsoever wind doth blow,
Some heart is glad to have it so,
And blow it east, or blow it west,
The wind that blows, that wind is best.

Ella Wheeler Wilcox.

HASTE NOT! REST NOT!

[TRANSLATION.]

Without haste! Without rest!
 Bind the motto to thy breast;
 Bear it with thee as a spell;
 Storm or sunshine, guard it well!
 Heed not flowers that 'round thee bloom,
 Bear it onward to the tomb!

Haste not! Let no thoughtless deed
 Mar for aye the spirit's speed!
 Ponder well, and know the right,
 Onward then, with all thy might.
 Haste not! Years can ne'er atone
 For one reckless action done.

Rest not! Life is sweeping by,
 Go and dare, before you die;
 Something mighty and sublime
 Leave behind to conquer time!
 Glorious 'tis to live for aye,
 When these forms have passed away.

Haste not! rest not! calmly wait;
 Meekly bear the storms of fate!
 Duty be thy polar guide;—
 Do the right whate'er betide!
 Haste not! rest not! conflicts past,
 God shall crown thy head at last.

Johann Wolfgang von Goethe.

TO-DAY.

So here hath been dawning
 Another blue Day:
 Think wilt thou let it
 Slip useless away.

Out of Eternity
 This new Day is born;
 Into Eternity,
 At night, will return.

Behold it aforeside
 No eye ever did:
 So soon it forever
 From all eyes is hid.

Here hath been dawning
 Another blue Day:
 Think wilt thou let it
 Slip useless away.

Thomas Carlyle.

Des Himmels Wolken tausend
 Der Erde Frieden zu,
 Bei Abendglockenlauten,
 Ging die Natur zur Ruh.

Friedrich Rückert.

We stride the river daily at its spring,
Nor, in our childish thoughtlessness, forsee,
What myriad vassal streams shall tribute bring,
How like an equal it shall greet the sea.
O small beginnings, ye are great and strong,
Based on a faithful heart and weariless brain!
Ye build the future fair, ye conquer wrong,
Ye earn the crown, and wear it not in vain.

James Russel Lowell.

A SHORT LIFE.

It is not growing like a tree
In bulk, doth make man better be;
Or standing long an oak, three hundred year,
To fall a log at last, dry, bald, and sere!
A lily of a day
Is fairer far in May,—

Although it fall and die that night,
It was the plant and flower of light.
In small proportions we just beauties see;
And in short measures life may perfect be.

Ben Johnson.

And were this world all Devils o'er,
 And watching to devour us,
 We lay it not to heart so sore,
 Not they can overpower us.
 And let the Prince of Ill
 Look grim as e'er he will,
 He harms us not a whit :
 For why? His doom is writ,
 A word shall quickly slay him.

God's Word, for all their craft and force,
 One moment will not linger,
 But spite of Hell, shall have its course,
 'Tis written by his finger.
 And though they take our life,
 Goods, honour, children, wife,
 Yet is their profit small ;
 These things shall vanish all,
 The City of God remaineth.

WILLIAM LLOYD GARRISON.

In a small chamber, friendless and unseen,
 Toiled o'er his types one poor, unlearned young man ;
 The place was dark, unfurnished, and mean ;—
 Yet then the freedom of a race began.
 Help came but slowly ; surely no man yet
 Put lever to the heavy world with less :
 What need of help? He knew how types were set,
 He had a dauntless spirit, and a press.
 Such earnest natures are the fiery pith,
 The compact nucleus, round which systems grow !
 Mass after mass becomes inspired therewith,
 And whirls impregnate with the central glow.
 O Truth ! O Freedom ! how are ye still born
 In the rude stable, in the manger nursed !
 What humble hands unbar those gates of morn
 Through which the splendours of the New Day burst ?
 What ! shall one mouth, scarce known beyond his cell,
 Front Rome's far-reaching bolts, and scorn her frown ?
 Brave Luther answered *Yes* ; that thunder's swell
 Rocked Europe, and discharmed the triple crown.
 Whatever can be known of earth we know,
 Sneered Europe's wise men in their snail-shells curled ;
 No ! said one man in Genoa, and that No
 Out of the dark created this New World.

* * * * *

EINE FESTE BURG IST UNSER GOTT.

Eine feste Burg ist unser Gott,
 Ein gutes Wehr und Waffen;
 Er hilft uns frey aus aller Noth,
 Die uns jetzt hat betroffen.
 Der alte böse Feind
 Mit Ernst ers jetzt meint;
 Gross Macht und viel List
 Sein grausam' Rüstzeuch ist,
 Auf Erd'n ist nicht seins Gleichen.
 Mit unsrer Macht ist Nichts gethan,
 Wir sind gar bald verloren:
 Es streit't für uns der rechte Mann,
 Den Gott selbst hat erkoren.
 Fragst du wer er ist?
 Er heisst Jesus Christ,
 Der Herre Zebaoth,
 Und ist kein ander Gott,
 Das Feld muss er behalten.
 Und wenn die Welt voll Teufel wär,
 Und wollt'n uns gar verschlingen,
 So fürchten wir uns nicht so sehr,
 Es soll uns doch gelingen.
 Der Fürste diessr Welt,
 Wie sauer er sich stellt,
 Thut er uns doch Nichts;
 Das macht er ist gerichttt,
 Ein Wörtlein kann ihn fällen.

Das Wort sie sollen lassen stahn,
 Und keinen Dank dazu haben;
 Er ist bey uns wohl auf dem Plan
 Mit seinem Geist und Gaben.
 Nehmen sie uns den Leib,
 Gut,' Ehr,' Kind und Weib,
 Lass fahren dahin.
 Sie haben's kein Gewinn,
 Das Reich Gottes muss uns bleiben.

(Translation, by Thomas Carlyle.)

A safe stronghold our God is still,
 A trusty shield and weapon;
 He'll help us clear from all the ill
 That hath us now o'ertaken.
 The ancient Prince of Hell
 Hath risen with purpose fell;
 Strong mail of Craft and Power
 He weareth in this hour,
 On Earth is not his fellow.
 With force of arms we nothing can,
 Full soon were we down-ridden;
 But for us fights the proper Man,
 Whom God himself hath bidden.
 Ask ye, Who is this same?
 Christ Jesus is his name,
 The Lord Zebaoth's Son.
 He and no other one
 Shall conquer in the battle.

(4)

VI.

Faith at her zenith, or all but lost in the gloom of doubts
that darken the schools;
Craft with a bunch of all-heal in her hand, followed
up by her vassal legion of fools;

VII.

Pain, that has crawled from the corpse of pleasure, a
worm which writhes all day, and at night
Stirs up again in the heart of the sleeper, and stings him
back to the curse of the light.

VIII.

Wealth with his wifes and wedded harlots; Flattery
gilding the rift of a throne;
Opulent Avarice, lean as Poverty; honest Poverty, bare
to the bone;

IX.

Love for the maiden crown'd with marriage, no regrets
for aught that has been,
Household happiness, gracious children, debtless com-
petence, golden mean;

X.

National hatreds of whole generations, and pigmy spite
of the village spire;
Vows that will last, to the last death-rattle, and vows
that are snapt in a moment of fire;

(5)

XI.

He that has lived for the lust of the minute, and died
in the doing it, flesh without mind;
He that has nail'd all flesh to the cross, till self died
out in the love of his kind;

XII.

Spring and Summer and Autumn and Winter, and all
these revolutions of earth;
All new-old revolutions of Empire—change of tide—
what is all of it worth?

XIII.

What the philosophies, all the sciences, poesy, varying
voices of prayer?
All that is noblest, all that is basest, all that is filthy,
with all that is fair?

XIV.

What is it all, if we all of us end but in being our
own corpse-coffins at last,
Swallow'd in Vastness, lost in Silence, drown'd in the
deeps of a meaningless past?

XV.

What but a murmur of gnats in the gloom, or a moment's
anger of bees in their hive?—

* * * * *

Peace, let it be! for I loved him, and love him for ever:
the dead are not dead but alive.

Alfred Tennyson.

(2)

THE CANZONA.

Composed by *Sovonarola* in 1472 at his twentieth age
Two verses translated by R. R. Madden.

Now downcast worth and goodness fold their wings,
The rabble shout, the thoughtless jest and smile;
And luxury in syren accents sings,
And grave philosophy doth e'en beguile
The few who keep in the right road; meanwhile
All hope would sink within me at this doom,
To see the triumphs of the false and vile;
But that I know the reign of Christ will come,
With joy for justice, for all oppressions, grief and gloom.

Oh, muse of mine! be it thy destiny
To leave the purple still unsought,
To fly the palace and the court, and be
A chary keeper of thy heart's deep thought;
A stranger to the wisdom that is fraught
With worldly instincts and a foe to men
Of worldly minds, of sordid views; let nought
Oh, muse of mine, thy spotless plumage stain,
Or the soft pinion, as it soars on high restrain.

(3)

VASTNESS.

I.

Many a hearth upon our dark globe sighs after many a
vanished face,
Many a planet by many a sun may roll with the dust
of a vanish'd race.

II.

Raving politics, never at rest—as this poor earth's pale
history runs,—
What is it all but a trouble of ants in the gleam of a
million million of suns?

III.

Lies upon this side, lies upon that side, truthless violence
mourn'd by the Wise,
Thousands of voices drowning his own in a popular
torrent of lies upon lies;

IV.

Stately purposes, valour in battle, glorious annals of
army and fleet,
Death for the right cause, death for the wrong cause,
trumpets of victory, groans of defeat;

V.

Innocence seethed in her mother's milk, and Charity
setting the martyr aflame;
Thralldom who walks with the banner of Freedom, and
recks not to ruin a realm in her name.

版 權 所 有

明治三十年七月二十五日發行
 明治三十年七月二十二日印刷

著者 內村 鑑三
 發行者 東京市京橋區出雲町一番地 福永文之助
 印刷者 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地 高田乙三
 發行者 東京市京橋區出雲町一番地 警醒社書店
 印刷所 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地 英會社 秀英舍

愛吟奧付

AI-GIN

(Favorite Singing).

Poetry is the morning dream of great minds.—Alphonso Lamartine.
 Poetry is not the proper antithesis to prose, but to science.—Coleridge.
 For the great Idea,
 That, O my brethren, that is the mission of poets.—Walt Whitman.

THE POET'S SOUL.

Within his soul are singing birds,
 And diamond thoughts and golden words,
 Mountains, meadows, lowing herds,
 Within his soul;

And joy and sorrow, darkness, light,
 Sunshine and shadow, day and night,
 Hatred of wrong and love of right;

And one eternal, constant prayer,
 A hunger and a thirst are there,
 For deathless deeds to do, to dare—
 Within his soul.

Robert Loveman.

●再版 地人論 內村鑑三君著 定價四十錢 郵稅六錢

●再版 求安錄 全 定價三十錢 郵稅六錢

●三版 基督信徒の慰 全 定價廿五錢 郵稅四錢

●紀念論文 ヨロムブス功績 全 定價十六錢 郵稅四錢

●傳道の精神 全 定價十五錢 郵稅四錢

●貞操美談 路得記 媳と姑の福音 全 定價十五錢 郵稅二錢

●英如何にして余は基督信徒 全 定價四十錢 郵稅四錢

●再教科及版獨習用 新英語學 志賀重昂君序 內村達三郎君編 定價五十錢 郵稅六錢